文化財だより

第6号

平成5年3月

発行　真鶴町教育委員会

特集　真鶴貴船神社の船祭り

船祭りの伝承

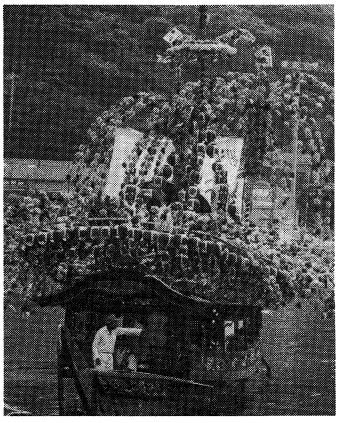
貴船祭り保存会　推進本部

青木　秀夫

真鶴町を代表する夏の伝統行事、貴船祭りは、宮城の塩釜神社、広島の厳島神社の船祭りとともに、日本三船祭りの一つに数えられ、昭和三十三年神奈川県無形文化財に、昭和五十一年には県無形民俗文化財に指定されました。

この船祭りは、神輿の海上渡御（櫂伝馬・小早船による神輿船の曳航）と船歌や鹿島踊りなどが加わり、文化財として価値高いものと認められたわけです。

そして、その絢爛（けんらん）豪華な船祭りが、古くからの真鶴の漁業、石材業、回漕業・商業と結びついて、歴史と伝統の中で育まれ、自然環境と厳しい生活条件を反映しながらも、各種職能技術集団の社会的奉仕活動に支えられて来たことに、重要な意義があると思います。



この祭りの、歴史的背景や文化財としての意義、船祭りの形式については、

○神奈川県文化財図鑑　無形文化財民俗資料篇

○神奈川県文化財調査報告書　第26集

○神奈川県民俗芸能誌増補改定と民謡編

○足柄下郡神社誌

○真鶴町貴船神社例祭御輿渡御式次第書

○真鶴町郷土を知る会編「真鶴21号」

○真鶴町観光協会「真鶴貴船まつり」

など多くの資料に書かれておりますので是非皆様にご一読をお勧めしたいと考えております。

私達、貴船祭り推進本部委員はじめ、祭りを盛りあげる保存会の一人ひとりは、先輩から伝えられて来た祭りに対する心の在り方や何気ない動作の一つ一つを、現代の中に確実に伝え、生きつづけさせなければと思うわけです。

こんな事を考えた時「今なら残せる。残さなければいけないのではないか。」と思いました。

青木重春さん・**青木民雄**さん・**川村虎夫**さん・**小清水勲**さん・**露木良彦**さん・**長島貞男**さん・**白田寛**さん・**平井常作**さん・**福島三郎**さん。多くの方々に集まって戴き座談会を開いたり、お話を伺ったり、資料を出して戴いたりして、肌に染み込んだ、昔からの伝承のあれこれを教育委員会の担当の方と纏めてみました。

先人から受け継いだ真鶴を大切に守り育てましょう。

目　次

特集　貴船神社の船祭り

船祭りの伝承……1

貴船祭りと真鶴の若い衆……2

祭りを支える舞台裏……2

小早船の水浮け……3

お迎え行事と遣幣使……3

花漕ぎ・花山車……4

神輿の渡御……4

鹿島踊り……5

祭り囃子とチャッパの若衆……5

座談・対談

青木　重春　青木　民雄

青木　秀夫　川村　虎夫

小清水　勲　露木　良彦

長島　貞男　白田　寛

平井　常作　福島　三郎

のみなさん

楽しい郷土学習　岩小　児童…6

私たちの郷土研究　真鶴小三年…7

真鶴民謡あれこれ……8

貴船祭りと ❑ 真鶴の若い衆（青年団）❑

昔の貴船祭りは、真鶴の石船（回漕業）漁業・石材業・商家の若い衆（青年団）が、町の宿老などと言われる舳乗りなどの役員から依頼されて、職種別に祭りを分担して行いました。

若い衆、青年会、青年団と時代によって呼び名は変わって来ました。

その昔、青年の集会所は、青年会場と言って西と東に一つずつ専用の建物がありました。

昭和八年、現在の公民館前停留所前（青木写真館上）に青年会館が建てられ、昭和二十四年九月に真鶴町公民館として転用開設された経緯があります。

この青年会へ入るのには、大変厳しい条件がありました。品行方正で地域の有力者に身元を保証され、仮り親になって戴き、入会するわけです。入会したての十七歳では、走り使いの小若衆、二十五歳でやっと若衆組の正会員になれたのです。小若衆では、酒・煙草も禁じられた程、躾が厳しかったようです。

若い衆（青年会）の学習は、夜間補習学校的な性格を持っていて、小学校の先生の出張授業や討論会、句会などの学習のほか腕相撲などもしたそうです。

また、青年会の活動は、町の道普請や寒空の元、金棒を「ジャラン・ジャラン」と鳴らしながら夜廻り（夜警）を行ったり、沖網漁場の定置網の錘りとなる俵への砂詰め作業をしたそうです。

今で言うなら、社会的ボランティア活動をして、会の運営費や祭典の諸経費を捻出し、祭りを支えていました。

然し、昭和二十年代・三十年代と時代が変化してきますと、青年の気質も異ってきたようです。

祭りを支えた青年会は、青年団に、そして現代の長老方が作られた氏子青年団は、発展して「神輿」「小早船」「花漕ぎ・花山車」「囃子」「鹿島踊り」保存会となり、現在のようになりました。

七月の声を聞くと「祭り」「祭り」の意識は、町に住む人々の心を踊らせますが、忘れてならないことは、町を出て他の都市で働いている若者や、他の都市に住んでいる人達が、祭りに合わせて帰省し、保存会に参加、祭りを盛りあげていることです。真鶴の「真鶴っ子」気質と言うものでしょうか。

祭りを支える 舞台裏

花島鳳竜の彫刻、幔幕、提灯、台傘などに飾られた小早船。五色のたすきもりりしい花漕ぎ。蝶の舞う花山車。浴衣姿の鹿島踊り。祭りを盛りあげるお囃子。

祭りが行われる一月も前から、貴船祭りの準備が始められたそうです。

東西の青年会場から、神田囃子系の真鶴囃子（シャギリなど）の練習が暗くなった街々の屋根に響き、夜の海に流れていきます。

主導者、唄いあげの唄う

「**マコト**ヲヲ**ヤ**ヤー**ラ**ア
ノヲーナエエエ**マ**アー**ナ**
ツウウウ**ル**ウウ**ミ**イー**ナ**
アア**ト**ヲヲンヲー**エ**…」

鹿島唄に合わせて踊る丸踊り、三列方形踊りの練習は一週間前（今は前日）のお天王さんへの奉納を目安に額に汗を流して行われ、郷土舞踊を伝承しようと長老も若い衆（現在は真鶴小・中学校児童・生徒）も一心になって踊りの振りを練習します。

海辺では、六寸角の角材の頭を十字に組み、砂を詰めた二俵の俵を縄で括り、花山車の右廻り左廻りの振りを練習している石船の力自慢の若者。石工として、石材運搬人としてどれだけ力を蓄えたかを示す機会だと、練習に熱が入ります。

夜目にも鮮やかな白い水飛沫をあげ棕櫚で編んだ櫂引き（艪綱）も切れんばかりに練習している石船の若い衆の姿は、当日の源平船比べ、競漕への意気込みを感じさせます。

明りをつけた青年会場（後に魚市場）では、若い衆や漁師の人達が、京花紙を五・六枚細長く交互に折って、小早船の花飾り、花山車のさし花・しの花作り、そしてキリギリスのチャッパ飾の花を丹念に作ります。（今はビニルの造花）

祭りのおよそ二週間前の大安の日に、小早船、櫂伝馬の庫出しが行われます。

現在は、神社下の倉庫に舟・彫刻物などが仕舞われていますが、昔は東西の大きな漁師小屋に、仕舞われていました。大正の関東大震災の時、東の小早と櫂伝馬が焼失したそうです。

庫出しの終った小早船は、西と東の浜で、漁師さん達によって屋形が組み立てられます。精巧な彫刻を施した花鳥鳳竜の欄間の裏には記号が書いてあって、それに従ってはめ込みます。

屋形の前後の入口には御簾をおろし、猖々緋の幔幕をめぐらし、吹流し・船名旗・薙刀・大鳥毛・槍・台傘・提灯・造花などで飾り、頭部に将棋の駒・賽子を付けた花幣を中央に立て装飾をします。

いよいよ、明日は祭りの日です。

小早船の水浮け

精巧な彫刻・巴紋のある幔幕をし、将棋・賽子をつけた華やかな花幣を建て、神招きの古代信仰の遺風を残した小早船が、朝の光りを受けて出番を待っています。

小早船、昔は、廻船として、又、水軍として使われたと言われていますが、真鶴の言い伝えでは、救助船として使用されたということです。

本来は、八丁艪で素早く救助作業に当たったと言われています。祭り当日は、二丁艪で漕ぎ、櫂伝馬の曳航を助けています。

いよいよ、舳乗り迎えが始まります。船頭は、青年会代表二名の若者を伴って、舳乗りと称する長老の家を尋ねます。玄関先で、若者の一人が、

「氏子青年会本部より、お迎えに参りました。お取り次ぎをお願いします」と、それに答えて玄関では、「本日は、お暑い中をお出迎えご苦労様でございます。どうぞ、お上がり下さい。」と舳乗りの奥さんのあいさつがあり、ついで婦人に伴われ、床の間のある座敷に案内されます。床の間を背にして、舳乗りが床机に腰をかけ、その前に船頭を真中にして若者が座ります。

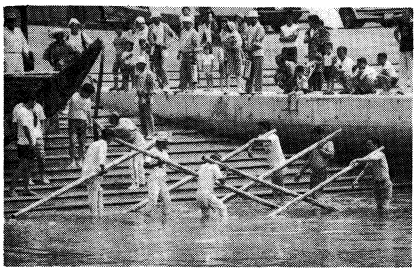
お神酒・きゅうりもみ・じんだんごの酢の物・寿司が出され、お神酒をいただきます。そして若者の一人から

「本日は、お日柄もよろしく、結構なお祭り日でございます。祭典の準備万端相整いましたので、お迎えにまいりました。お支度よろしければ、ご案内申しあげます」と口上が述べられ若者・船頭・舳乗り・若者の順で、海岸の小早船置き場へ向かいます。

舳乗りは、船首に向かって左側から乗り込みます。（降りる時は右側）西の舳乗りが貴宮丸に乗った後、東の舳乗りが東明丸に乗り込みます。（昔からの決め）

いよいよ、水浮けの神事が始められます。水浮けも西から始めます。

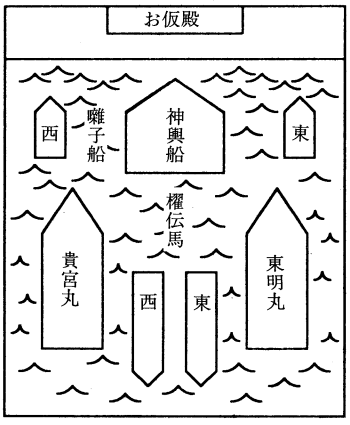
小早船の彫刻飾りの下には、太い孟宗の竹竿が括りつけてあります。大勢のチャッパの若い衆が、これを担ぎ船揺りをしながら海へ突入します。波打ち際には、「水しら（桧丸太）」を交差させるように両方から肩に担いだ花漕ぎの若者が六人程待っています。



船は、水飛沫をあげて海に入ります。船首にぶらさがり船と共に飛沫の中に入るのが、鹿島踊り連の若者達です。

お迎え行事と遣幣使

貴宮丸・東明丸の水浮けも無事終了。お仮殿前の海上には神輿船・小早船・櫂伝馬・囃子船が図のように勢揃いします。



御輿船は、鉄製の台船を用いていますが、昔は舫ちょう船（石材を海岸から本船まで運んだ堅牢な平たい船）を二列三艘ずつ縦に撃ぎサナ板を横に渡し、麻縄で固定して、桟敷風に作りました。これは、江戸築城などの大石運搬に使われた技術を応用したものだと思われます。

遣幣使は、貴船神社で正装し、「宮本」（神職の休憩所）へ来られます。玄関前には、戸主会（今は奉賛会）の正副会長が待っていて、出迎えます。

「本日は、お暑い中ご苦労様です。神輿船など準備が整いますまで、暫時ご休息下さい。」と挨拶し、控えの間に案内をします。

明治末年から昭和二十年までは、供進使が、郡または町から派遣されていました。現在では、神社庁から派遣されますが、箱根神社・平塚の八幡神社など県下の大きなお宮の宮司さん方が来られます。

祭りの推進本部委員は、神輿船・小早船・櫂伝馬・囃子船と綿密な連絡を取り遣幣使をお迎えにまいります。

推進本部正副委員長は、

「神輿船・小早船など準備万端整いましたので、ご乗船をお願いします。」

と挨拶し案内します。遣幣使の乗船と同時に東西の囃子船は太鼓を打ち込みます。

海上では、東西の櫂伝馬・貴宮丸と東明丸の神酒交換（角樽交換）が行われます。若い衆は、小早両船の内側、舳乗りの後ろから浴衣掛けで海へ入り、海中で両者の角樽交換が行われます。この時の口上も決められています。舳乗りに水飛沫をかけることなど絶対にしてはならないことでしたので、注意の上にも注意をしたそうです。

櫂伝馬は、小早船・神輿船の曳航態勢に入り、勇ましい掛け声と共に力強く櫂が漕がれ艪綱はキュッキュッと鳴きます。小早の陳の間からは、唄の助の歌う黄帝の調べが流れ出します。

貴宮丸・東明丸・囃子船は、内側回りで進行方向を変え出発です。

いよいよ、神輿のお迎えです。

花漕ぎ・花山車

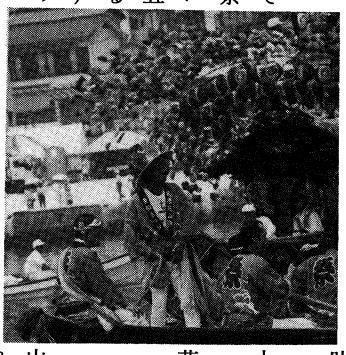
花漕ぎ・花山車は、共に石舟の人々、機帆船の屈強な若者達が、船主や船頭の長老から選ばれて、これに当たりました。

力自慢の上、東西対抗意識も加わり、練習に練習を重ねて祭りの当日を迎えるのです。

東西の櫂伝馬は、小早船・神輿船を曳航する訳ですから、大変な労働です。船の両舷に七人ずつ櫂を握り、艫に一丁の大櫂。合わせて十五人で漕ぐわけです。また、船頭が一・二名乗り、掛け声を掛けたり、「松前」とか「追分」とか言われる歌を唄ったりします。

櫂伝馬の舳頭には、角樽・棕櫚縄・五色の布が飾られています。これは、船神様を祭る心の顕れだとも言われています。海の水で清められた五色の布は、妊婦の腹帯にすると安産という信仰がありますが、舳頭で清められた五色の布は、漕ぎ手の家族に渡され、一般には、若者達のかけた五色のタスキがこの代わりをし安産の腹帯とされました。

神迎えの際、小早船・神輿船などの全船が、神社下の突堤付近まで来ると、曳航の綱を引き伸ばして「舟比べ」、二艘の櫂伝馬の競漕が行われます。



東西に分れての競漕は、町を二分する程意識は燃えあがり。負けられぬものかと船頭は掛け声を掛け、若者達は、ここを先途と頑張り、棕櫚の櫂引き（艪綱）は、キュッキュッと鳴いたと言われています。

競漕が終れば、流し櫂。江戸で覚えた「追分」が艫の船頭さんの口をつき、美しい唄声は海面を流れていきます。

「空を眺めて、ほろりと涙ヤンサーエー
あの空あたりが、主の家
会いたい見たいは　やまやまなれど
出るに出られぬ　篭の鳥　コアサ
橋の上から　芸者の身投げ
助けておくれよ　船頭さん
十四の春より　船頭衆をすれど
芸者の水あげ　今　初めて」

お仮殿で造られた花山車は、発心寺に運ばれています。午後三時半（現在は四時半）役員や長老が花山車に参拝します。すると拍子木が打たれ、これを合図に手指しの作法で持たれた花山車は、お仮殿へ向い出発します。

宮司の平井家は、常泉寺の壇家であり、寺には「平井の間」（センショウの間）がありました。昔はこの部屋で花山車が造られ、飾られ、古風な作法に従って船方衆に引き渡されたと言います。

この花山車は、大昔の大真榊にシデ（しめ）をかけた物から進化・装飾化されたものだろうと考えられ、露払いとして行列の先頭を行ったものでしょう。

真鶴の万燈型の花山車は、手指し（肩に担いではいけない）の作法で振りながら運ばなければなりません。万燈の上部のさし花・しの花に蝶がひらひらと舞うようにすることが大切だと言われます。

花山車の行列は、前後に警護役がつき、拍子木を打つ者と脇持ちといって補助するものが四・五人傍につく。そして他の者は縦に並んでその後ろに続きます。

辻・辻で、道を清める作法が行われます。古老の打つ拍子木の音によって、七五三・三二などの振りの作法が決まります。数の多い方から右回り左と決められています。「獅子頭振り」「神輿振り」と同じ意味をもつ、災難を除く作法だと言われます。

現在では、六十キロ以上もある、不安定な花山車を振ることは大変なので、振り手が先に振り方を指定し拍子木を打ってもらいます。

翌日、鹿島踊りと花山車のあいちがい。踊りや振りで道を清めます。町内巡行は、常に花山車・鹿島踊り・神輿・囃子連・つけ祭りの順で行われます。神輿が自動車で運ばれる時代になっても行列の順は変わりません。

昔、千歳屋の前に七つの獅子頭が飾られた時もあったそうです。

神輿の渡御

現在、神輿が海上を渡御する祭りは、神奈川県では、真鶴の貴船神社しかありません。（大磯は船山車に・三崎は明治時代に廃止）

お迎えの遣幣使が、宮の前海岸から神社へ参ります。神社では、御霊うつしの祭典、玉串奉奠の儀式が行われた後、神輿の前で発輿祭が関係者一同の参加のもと行われます。

鹿島踊り連を先頭に神輿・斉主・祭典役員は、宮の前海岸へ進みます。

神職の乗船と同時に囃子船は太鼓を打ち込み櫂伝馬は出発します。神輿の海上渡御が始まるわけですが、海上では迎えの時と同じ様に曳航や舟比べが行われ、唄の助の唄声も聞かれます。

神輿は上陸の後、磯崎の東船上げ場付近で海中に入ります。神輿の神霊を強める儀式として重要な行事です。

「貴船の祭りは、鹿島踊りに始まり、鹿島踊りで終る。」と言われています。事実、祭礼の一週間前（今は前日）、お天王社（津島神社）への鹿島踊り奉納から祭りが始まります。

鹿島踊りの警護・唄上・青年会の会長・戸主会の代表などが、天王社に供物を捧げ「地域を支配する荒神様を鎮めて戴きたい」と参拝した後、「本日は、貴船の祭りに備えての鹿島踊りの揃いを、ご高覧に供します。これでよろしいか、ご検分の程よろしくお願い申し上げます。」と、警護役の代表が口上を述べ、丸踊りから三列方形踊りが演じられます。

鹿島踊り

その後、奉賛会の代表が参拝し、東西の囃子連の練習披露が行われます。

祭りの当日は、十二時三十分頃、神社階段下で、奉納の鹿島踊りが舞われます。

翌二十八日、午前八時三十分頃、ええちがい（あいちがい）の儀式が行われます。花山車は、お仮殿前から西本払いへ。鹿島踊り連は、西本払いからお仮殿前へ。途中、海岸通り中央（現在は祭典本部前）で、すれ違います。この時、帽子を取り、衿を正して両者の役員、代表者が、「よろしくお願いします。」と挨拶をして分かれます。

しかし、昔は、祭礼諸行事の開始ということもあって、東西の青年会の役員、戸主会代表。花山車は、警護・拍子木・力自慢の者。鹿島踊り連は、警護・唄上・鉦・太鼓・日月の代表が、威儀を正して中央に集まります。そして、代表が、「本日は、お日柄もよろしく、大変よいお祭日和でございます。四辻、四辻で鹿島踊りを踊りますので（花山車を振りますので）よろしく、ご検分の程、お願い申しあげます。」と述べますと、相手側は、「ご挨拶、恐縮に存じます。当方も、四辻、四辻で（前文と反対になる）……、ご検分の程よろしくお願い申しあげます」（年度によって順が決められていた）と真剣に心を込めた作法が行われたそうです。

真鶴の鹿島踊りの特色は、小江戸と呼ばれた文化の進取性と大漁踊り、盆踊りなどの庶民化、風流化から、よそとは服装が異なり揃いの浴衣です。

唄は、アエイオウの母音を長く引くことと、歌い出の音が消えていたりして、元歌があまりよく聞き取れません。

「ヲヘンント**ヲヲモヲヲヘエーニ**イイイ**ワ**アナエ……」「艫舳には」となります。

又、鹿島唄は神聖な歌だから、祭りの後の宴席では、歌ってはならないと厳しく言い伝えられています。

＊＊＊＊ 祭り囃子とチャッパの若衆 ＊＊＊＊

祭りを盛りあげ、熱気を発散させるのは、何といっても祭り囃子ではないでしょうか。

真鶴のお囃子。神輿船の後ろから行く色どり鮮かな囃子船と、昔はキリギリス篭といった囃子篭（現在は自動車による屋台囃子）がありました。

この囃子連と祭り芝居を取り仕切るのが、真鶴の商家を中心とした一般家庭の人達でした。

紅白に分かれ「源平祭り」と言い、東西で競いあった貴船祭り。「力自慢の男の祭り」とも言った豪快な祭り。東西に分かれ、その一翼を担ったのが、チャッパの若衆（囃子方の若者）だったとも言われています。

祭りの最中に出される、キュウリモミ・じんだんごの酢物は、四斗樽に何杯も作り、それぞれの本部に届けたと言われています。

又、芝居の小屋掛けも大変なものでした。宵宮に東地区で開かれた芝居小屋を、その夜の内に片付け、西地区に移し建てる。こんな仕事も若者の労働でした。

囃子船は、三杯の漁船（小舟）を、括り、サナ板を渡して櫓を組みました。

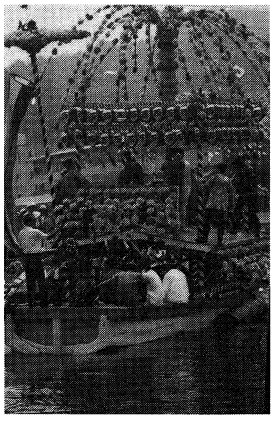
坂道（階段）の多い真鶴特有の「キリギリス篭」と呼ばれる囃子篭は、孟宗竹を主にして、篭の枠組を作りました。前後の中段には桧の担ぎ棒を、下の台には小さな車も付けました。

飾りつけは、天井を漁師さんの大漁旗で覆い、廂（軒）には、竹笹（チャッ葉）を差し込み造花で飾ります。篭の前面上部に、東西で工夫した絵の描れた行灯を乗せ、篭の周りを幕で覆いました。

内部は、三つに分かれていて、前二列に小太鼓を乗せ、後ろに大太鼓を置きます。囃方は、太鼓を叩きながら歩きます。鉦や笛は、「キリギリス篭」の周囲に居て、篭と共に歩きながら吹いたり、鳴らしたりしたわけです。必ず、神輿の後ろから、行列の速度を合わせながら歩いたと言われています。

真鶴囃子は、「神田囃子系」の流れを汲む、小田原囃子と似ています。祭り全体を通して流すのが、「シャギリ」。神送りをした後、流すのが「聖天」と「神田丸」になっています。

現在の囃子連の服装は法被ですが、昔は浴衣だったそうです。



楽しい郷土学習
岩小学校

おちばをさがして……

一年　川端みずき

みんなで岩かいがんのちかくの、さかみちがいっぱいある、山の上に、てんぐさんを見にいきました。ひとりは、はながかけていたので、ちょこっとこわかったです。

とちゅうでヘビがとかげをくわえているのを見ました。ヘビはとかげをたべてしまうと、からだをくるくるまいて、気もちよさそうにやすんでいました。

おちばをひろうと、赤やきいろがありました。ながいはっぱは、上のほうがすこしきれていたので、うさぎにして、もみじは、ゆきのけっしょうにしました。

（一年生活科「秋とあそぼう」）

ワクワクドキドキ大ぼうけん

二年　鈴木　由佳

わたしたちは、生かつかの時間に、海や山へ行きました。海は大きなあみがほしてありました。べんてんじまや岩大はしも見ました。海の近くのてんぐさんの山やお寺に行きました。岩大はしの下あたりでおべんとうをたべました。ちょうどやがいきゅうしょくだったので、それから山にも行きました。

きゅうなさかみてでちょっとつかれました。でも山には、いろんなしぜんがありました。木のはの色はたくさんあってきれいです。木のみもたくさんおちていました。山の上から見た海の色は、まっさおでとてもすてきでした。

わたしの町には、すてきなものがいっぱいあるんだなと思いました。

（二年　生活科、体験学習より）

みかん畑に行って

三年　杉山　真一

松本農園でみかん農家の仕事を勉強しました。最初はみかんのもぎ方を教えてもらい、その後、ちょぞう庫の中も見せてもらいました。中はゆかに板がおいてあったので、「何ですか」と聞いたら、空気を代えるためだそうで、みかんもよい空気がひつようなんだなと思いました。かべは土でできていて、天じょうやゆかにもあながあいていて、びっくりしました。

外に出て、木の手いれや育てる工夫も聞きました。真鶴は、海のしお風や日がよく当たってあたたかいので、みかん畑ができた、と聞いて、本当に自然を生かしているんだなと思いました。

知らない事が多くて、びっくりした事ばかりの一日でした。

（三年　社会科　校外学習より）

土屋格衛を調べて

四年　野崎　慎也

ぼくは、土屋格衛を調べる前、この人はどうして教科書に出るほど有名になったんだろうと思いました。教科書には、小松石を最初にほった人とあります。

そこで真鶴資料館に行って調べました。どこで石をほっていたかというと、小松山という所です。その山の名前が小松石になったということが分かりました。

石ほりは、七百年ごろから始まり、土屋格衛は、鎌倉時代の人でした。

江戸時代には、立派な小松石を使って江戸城を築くために、船で運んだそうです。古い歴史があるのも、土屋格衛が小松石を有名にしてくれたからだと思いました。ぼくは、土屋格衛はすごいなあと思いました。

（四年　社会科「地域の発展につくした先人の働き」から）

水産業「これからの漁業」を調べて

五年　渡辺　裕子

私はこれからの漁業を調べて、今はとる漁業から、育てる漁業へ向かっていることが分かりました。日本は限られた水産資源の中で、新しい設を造り、魚しょうを沈め、イケス等で養しょくしていくことが一番大切なことだと思います。

真鶴の海は、魚貝類が多くすんでいるので、もう少し大切に守らなければいけないと思います。あみでとりすぎないことや、海に排水を流さないこと、海岸をいつもきれいにすること、そして、し設を造って、魚がよく育つようにすすめることなど、やることがいっぱいあります。

後けい者を育てることも、真鶴の漁業の問題として残っていると思います。

（五年「水産業レポート」より）

源頼朝と関係がある真鶴・岩

六年　三角健一郎

ぼくは、社会科で鎌倉時代を勉強した時、真鶴が頼朝と深いかかわりがあることが分かりました。

岩の名前は、石橋山の合戦に敗れた頼朝が、敵からにげることができて、喜びのあまり「祝村」（いわいむら）という名をつけて、それが岩村となったそうです。また、謡坂は、そのお祝いに実平がうたいとまいをやった所です。児子神社は、頼朝が船出をする時、残る人々の安全を祈願して、霊をまつったといわれています。

このように、岩は頼朝と関係があり、場所の名前もその時代の人たちが考えてつけているようなのでおどろきました。

いつも何も考えずに遊んでいる場所でしたが、昔のことをよく考えるようになりました。ぼくの家のすぐ近くにある「謡坂の石ひ」も、よその町の人たちにもよく見てもらいたいと思います。

魚をとるしごと

土屋亜未

わたしは、魚をとるしごとの勉強をして、魚などのことがよくわかりました。

たとえば、真づるの魚のしゅるいのことです。真づるの海には、百五十しゅるいもの魚がいるそうです。わたしは、こんなにたくさんの魚がいるなんて、びっくりしてしまいました。また、とう台は夜、魚をとりに行った船が、まよわず、ちゃんと港に帰ってこれるようにあるのだということもわかりました。ほかにもいろいろしらなかったことがわかりました。

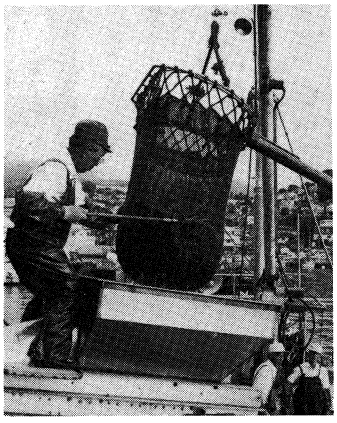
りょうしさんが学校に来て、むかしの魚のとる様子を教えてくれました。魚をとる船はどうなっていたのか、どうやって魚をとっていたのか、今の船はどんなふうになっているのかなどいろいろなことを教えてもらいました。りょうしさんに、

「魚をとるのに、こまることは何ですか」と聞いてみました。りょうしさんは、

「雨がふったあと、いい天気になりますね。そうすると、たくさんおせんたくをします。すると、せんたくをしたときに使った石けんが海に流れて、海がまっ白になってしまいます。とてもこまります」

「海の近くにある木を切られるのもこまります。かげになるところがなくなってしまうからね。」

と言っていました。わたしは、りょうしさんに話を聞いて、知らなかったことがたくさんわかりました。そして、りょうしさんのしごとは、ほんとうにたいへんなんだなあと思いました。

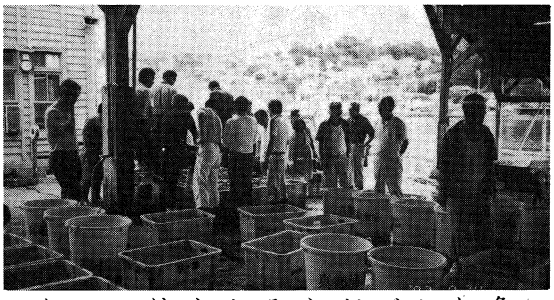


魚市場に行ったこと

山本知香

わたしは、社会科の勉強で魚市場に見学に行きました。魚市場には、大きいれいとうこや魚を入れるすいそうがありました。話をしてくれるおじさんが来るまで市場の中を見ていました。そのうちに、話をしてくれる市場のおじさんが来ました。わたしは、かばんからたんけん手帳を出して、お話を聞きました。おじさんは、しつ問にどんどん答えてくれました。

わたしは、りょうしさんたちがどんな魚をとるのか考えました。アジ・イワシ・ブリ・サバ・イカ・カイなんかをとるのかなあ。



わたしが魚の勉強をして思ったことは、真づるには海があるから、魚をとるのはかんたんだとおもっていたけど、いろいろとたいへんなんだなあということです。

わたしは、おじさんに話を聞いて、ソーダガツオ・ヤガラ・ボラなどの今までしらなかった魚の名前をおぼえることができました。

また、真づるには、たくさんのしゅるいの魚のいることも分かりました。

とてもいい勉強になりました。

❖ 私たちの郷土研究 ❖

真鶴のりょうしさん

ーおさかなとりのはなしー

真鶴小学校３年

りょうしさんに話を聞いて

井上真吾

ぼくは、ひでおおじさんにいろいろなことを教えてもらいました。はじめに、あみについてせつ明してもらいました。あみといってもいろいろな大きさがあるそうです。あみのしかけ方も教えてもらいました。昔は、手であみを引いていたそうです。船のへりにむねをつけていたのでいっぱいたこができたそうです。今はきかいがあるので楽になったと教えてくれました。

また、くらげがあみの中に入ると、魚が白くなって売れなくなってしまうとも教えてくれました。そして、電気くらげにさされると病院に行かなくてはならないそうです。ぼくは、たいへんだなあと思いました。

ぼくがびっくりしたのは、夜、海に明りをつけるとサンマが口をとがらせてとんでくるということでした。ぼくはこわいなあと思いました。りょうしさんに話がきけてよかったです。

真鶴民謡あれこれ

船歌

☆黄帝

ヤンレ目出度いな、天の岩戸の明暮れに
月も所も浜木綿の、影を映して三股の
誰を待乳の山つづき、見れば所は隅田川
流れに浮ぶ一葉の、船は昔の唐土のエン
黄帝いっしよつわものは
　文武二道の大将にてエン
或る時庭に立ち出でし
　池のおもてを眺むればエンヤトセイ
吹く秋風の柳のひとはが散りきて浮ぶ
エンエン波にただようその上に
　いづくともなくささくもが
雲の上よりをり来り
　ひとあかなればうち乗りて
エンみぎわに寄りし有様は
　げにもと思ひそめしより
舟をたくみて造り出し
　みかどに之をたてまつる
さてこそ舟の船の字は
　公にすすむと書くとかや
黄帝これに召されつつ
　四海を安漕ぎわたる
エン王位を治めたまふこと
　エン一万八千載とかや
かかるためしのおんもいは
　今に絶えせぬ舟あそび
なお　よろずよは限りなし

☆四季の歌

春は京都に花咲いて
　つつじ椿で目があかぬ
夏は涼しき卯の花に
　雲やかすみで目があかぬ
秋は龍田のもみじ葉に
　荻やすすきで目があかぬ
冬は笹葉に雪降りて
　雨やあられで目があかぬ

鹿島踊り歌

千早ふる神々のいさめなれば
　弥勒踊りめでたい
誠やら真鶴港へ、弥勒お船が着いたと
艫舳には伊勢と春日の、中は鹿島の御社
天竺が近いな　其のたたら踏むが聞える
其のたたら二度踏む
　たたらたたらと八つに踏む
鹿島では稚児が踊る
　護摩堂では護摩を焚く
其の護摩は　二度焚き候
　二本つづきと護摩を焚く
十七が沢におりて、黄金柄杓で水を汲む
水汲まば　袖が濡るる候を
　たすきをかけさ　十七
鎌倉の御所のお庭で十三小姫が酌をとる
酒よりも　肴よりも
　十三小姫が目にし着く
目に着かば連れてござれ
　エゾ・支那の果まで
天竺の雲の間で　十五御姫が米を撒く
その米は　二度撒き候
　二本続きと米を撒く

真鶴大漁節

一ツとせ　人も知ったる真鶴の
　鰤網漁場の　大矢声（浜大漁ダネ）
二ツとせ　夫婦そろって氏神の
　貴船の宮へ　願かけて　（〃）
三ツとせ　三っ石浜の潮干狩
　貝採る海女の　賑わしさ　（〃）
四ツとせ　よろずの神の守護をうけ
　海上静かに　大漁に　（〃）
五ツとせ　いつきてみてもこの港
　出船　入船　賑わしく　（〃）
六ツとせ　向う大島　安房　上総
　便りききたや　琴ケ浜　（〃）
七ツとせ　渚に遊ぶ　浜千鳥
　さまの帰りを　ともに待つ（〃）
八ツとせ　八丁艪　そろえて漕ぎ寄せる
　市場の　庭は　鰤の山　（〃）
九ツとせ　小松原から　戒崎
　見渡す　海原　魚の群　（〃）
十とせ　ともに揃いの　万祝で
　貴船の宮へ　礼まいり　（〃）

◐民俗資料館案内

土屋文雄氏のご厚意により、開館いたしております民俗資料館には、土屋家ご寄贈の貴重な美術工芸品、生活用品、町が収集した漁業・石材業関係の資料などが、コーナーを設けて展示してあります。開館日時は、毎週火・木・土・日曜日と祝祭日の午前十時から午後四時までです。是非ご見学下さい。

❖編集後記❖

文化財だより第六号　特集　県無形民俗文化財「貴船神社の船祭り」が大勢の町民の方々のお力添えを戴いて、出来上がりました。

昔からの伝統ある「船祭り」ですのでまだまだ、色々な仕来りや作法、世相と祭りの変遷などがあったと思います。

正しい文化を次の世代へ伝えたいと思いますので、皆様方の情報やご意見をお待ちしています。

なお、真鶴の民謡として五編載せました。「石工唄」「真鶴コチャエ節」「かぞえ唄」などなどがあると聞いています。ご存知の方は、是非お知らせ下さい。